



## 『無機質との曖昧な境界』

新潟県鍍金工業組合 青年部会長 横山 慎  
(有限会社横山メッキ工場)

新潟県鍍金工業組合青年部の会長を仰せつかっております。(有)横山メッキ工場、横山です。

最近、AIを活用して動画を作成したりして遊ぶことがあるのですが、いよいよAIが作る画像や動画を見て、違和感を感じる回数がめっきり減ってきています。以前は、影の位置が少しおかしかったり、動きが妙にスムーズすぎたり、そもそも人の動きをしていなかったりと、人とAIを見分ける“安心ポイント”がいくつかあったのですが、今ではその“境界”が緩やかに曖昧になりつつあります。気がつけば、シンギュラリティという言葉も、どこか現実味を帯びて聞こえるようになりました。

AIとやりとりしていると、不思議と「冷たさよりあたたかさ」を感じる瞬間があります。こちらが曖昧に投げた質問を、丁寧に整えて返してくれる。それはまるで、薄曇りの日に雲の隙間から一筋だけ差し込む日差しのような、控えめだけど確かなぬくもりです。“無機質な計算の塊”のはずなのに。

メッキの現場には、まだAIが入り込めない世界が広くあります。浴の変化、光沢の具合、手触りの微妙な差。どれも数字になる前の“あいまいな情報”で、ベテランの「そろそろ替え時だ」の一言には、長年の経験や勘——つまり“体に沁みだデータ”——が詰まっています。そんな中でAIと関わっていると、

「この曖昧さを、未来の誰かにどう伝えていけるのだろうか」と考えるようにもなりました。言語化が難しい技術ほど、AIのような存在が“橋渡し役”になってくれるのではないかと。人の五感とAIの分析が寄り添えば、これまで言葉にできなかった部分の輪郭が、少しずつ描かれていくのではないかと。そんな穏やかな未来の風景が思い浮かぶことがあります。そして、AIと向き合う時間が増えるほど、機械と人との距離が、以前よりずっと柔らかく感じられるようになりました。ときどき返ってくる言葉が妙に優しかったり、思わず「ありがとうございます」と言ってしまう自分がいたり。もちろん、それは膨大なデータが導き出したただの“最適解”にすぎません。それでも、そこにわずかな温度を感じ取ってしまうのは、AIが変わったのか、それとも私たちの側が変わり始めたのか。その答えは、もう少し先の未来にあるのかもしれない。

こうして書いている文章も、実はAIと何ターンか打ちあいながら書いています。

最近ではLINE等でAIが耳障りの良いことを文章にしたり伝えたりすると、まわりによく「これってAIでしょ」と言われることがあります。

そのときには、こう答えています。

これは“あい(愛)”なんですよ、と。